

研究助成など109件の助成を決定

——トヨタ財団第39回理事会——

トヨタ財団の第39回理事会は、この10月3日(水)に東京都内で開かれた。今回の理事会は研究助成などの助成対象の決定が主な議題。決定した助成は合計109件、金額にして3億2368万円、その主な内容は次のとおり。

◎研究助成は74件 2億2460万円——

若手の個人研究を対象とする第I種研究では19件3230万円、総合研究の準備を目的とする第II種研究では29件7170万円、学際的・国際的・職際的な総合研究の第III種研究は15件、1億80万円が決定。(P2~4参照)

また、市民活動の記録の作成に関する特定課題については11件、1980万円が助成対象となった。(P4~5参照)

なお、これらについては10月15日、東京の京王プラザホテルにて助成金贈呈式が行われた。

◎国際助成は26件 7701万円——

東南アジアを主な対象として、現地の人々が現地で行うプロジェクトを助成する国際助成は今回26件が助成対象となった。それぞれの地域の固有文化の振興をテーマとした研究プロジェクトが中心である。なお国際助成の本年度予算は1億3000万円であり、今回決定との差額分約5300万円については、来年3月の理事会で決定の予定。

◎「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成は7件、1697万円——

このプログラムには、東南アジアの本を日本に紹介する「日本向け」と日本の本を東南アジアの人々に紹介する「東南アジア向け」と東南アジア諸国間で相互に紹介する「東南アジア相互間」の3種があるが、今回は「東南アジア向け」の2件462万円、「東南アジア相互間」の5件1235万円が決定となった。これら3種を含む、当プログラムの本年度予算は7500万円となっており、今回決定との差額分は次回の3月理事会で決定の予定。

目次

| | |
|---------------------------|---|
| ◆研究助成の選考を終えて…………… | 2 |
| ◆1985年度研究助成対象者…………… | 3 |
| ◆研究助成・特定課題の選考を終えて…………… | 4 |
| ◆助成財団資料センター調査報告書まとまる・他… | 5 |
| ◆ハーグ・クラブの総会に出席して…………… | 6 |
| ◆国際ME学会で手話システムについて発表…………… | 7 |
| ◆新刊紹介他…………… | 8 |

第4回研究コンクール“身近な環境をみつめよう”

公募開始は11月から

1年おきに実施している研究コンクールは、この11月から研究計画の公募を開始する。締切りは来年1月15日。

このコンクールは「身近な環境」を対象とする研究のアイデアに対してまず助成を行い、その2年後の成果について褒賞を行うもの。今回は、これまでの3回の体験にもとづきプログラムの内容を再検討し、いくつかの点について改めた。関心をお持ちの方は、応募要項等の資料が整う11月以降に財団にご連絡を。(P8参照)

財団で仕事をする人々—アメリカの場合—

全米財団評議会 E. T. ボーリス女史を囲んで

この9月初旬、アメリカの財団評議会で研究部長をしておられるE. T. ボーリス女史が来日された。この機会にアメリカの財団事情についてお聞きするチャンスをもちたいと思い、9月11日(水)午後、トヨタ財団で懇談会をひらいた。(写真)

テーマは「アメリカの財団で仕事をする人々」。ちょうどボーリス女史はこれまでの実態調査をもとに *Working in Foundations* という本を出版されたところだったので、その内容を中心に話をさせていただいた。在京の財団関係者も10数名参加し、話を聞いたあとで議論がはずんだ。アメリカでも専門スタッフをもつ財団はあまり多くはなく、仕事をする上で色々問題もあるとのことであった。

報告するE. T. ボーリス女史(トヨタ財団会議室にて)





研究助成の選考を終えて

選考委員長 加藤 一郎

今年も厳しい暑さの中で大量の熱心な申請書類と取り組みながら、選考を予定どおり終えることができた。ただ、財団の研究助成には予算上のワクがあるため、申請者の1割弱しか採択できないという結果になり、申請者に対してはつらい思いをしたわけである。

選考の手順は、ほぼ前年度に準じている。ただし特定課題の「市民活動の記録作成」については、別途に独立した選考委員会を設けて選考していただいたため、その点では少し楽になった。

採択された個々の研究についての推薦理由は別途に各委員の方々に分担執筆していただいているので、ここでは全体的な特徴について気づいた点を、若干述べておきたい。

(採択件数)

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ種研究の合計で見ると、666件の申請に対して採択件数は63件となっている。採択率は9.5%であり、1割以下ということになる。63件の内訳は第Ⅰ種(個人奨励研究)が19件、第Ⅱ種(予備的研究)が29件、第Ⅲ種(総合研究)が15件である。応募要項に記された当初の採択予定件数は第Ⅰ・Ⅱ種とも約25件となっていたが、選考の結果、第Ⅱ種が増え、その分第Ⅰ種が減ることになった。もっとも、この結果、採択率という点では第Ⅰ・Ⅱ種はほぼ同じ程度ということになっている。

(第Ⅰ種研究=個人奨励研究について)

第Ⅰ種研究で採択となった19件のうち、10件は大学院学生の研究であり、3件は大学の研究員(生)の研究である。その他もほとんどの申請者が大学関係者である。民間財団の助成という性格から、もっとアカデミズム外の人々の研究も採択したかったが、結果的にはそれは2件にとどまった。来年度以降は、もっと多くの在野の研究者から、その特色を生かした申請が提出されることを期待したい。

なお、今回採択となった個人奨励研究は、大きなテーマをめざした意欲的なものが多い。1年間の助成でまとまるかという懸念のあるものもあるが、むしろ、これを足がかりとして新しい研究が始まるということに、期待をかけたいと思う。

(第Ⅱ種研究=予備的研究について)

第Ⅱ種研究は、学際的・国際的・職際的な共同研究のための予備研究という性格をもっている。昨年度はこの性格づけが十分浸透していなかったためか、文部省科学研究費の一般研究に相当するような一研究室内での研究の応募が多数見られたが、今年度はこのようなものはかなり減ってきた。そのためか申請件数は昨年度より約1割減ってきているが、それでも助成予定件数の10数倍であることには変わりはない。

さて、今年度採択された29件について見ると、過半数の15件が国際共同研究(日本人の協力を伴う外国人だけの共同研究1件も含む)であり、そのうちの5件は代表者が外国人である。それらの国籍は、中華人民共和国、イギリス、タイ、フィリピンとなっている。このように、国籍の制約をはずした自由な国際共同研究が行える点にトヨタ財団の研究助成の一つの特徴があるといえよう。

他の14件は日本人だけの共同研究であるが、いずれも学際性や職際性が強い。これらのうち民間財団らしい特徴はむしろ職際型の共同研究に見られるように思われる。

第Ⅱ種研究は、今後第Ⅲ種研究(総合研究)へと発展していくことが期待されるので、この1年間はじっくりとその足場を固める作業を進めてほしいと考えている。

(第Ⅲ種研究=総合研究について)

第Ⅲ種研究は34件の申請があり、15件が採択となった。採択率だけから見れば44.1%とかなり高いが、いずれもすでに予備的研究として難関を突破してきたものだけに、選考の厳しさからいえば、第Ⅰ・Ⅱ種よりもはるかに厳しかったといえよう。選考する側でも、これまでの報告書等を検討するなど、作業的にもかなり労力を要したわけである。

15件中の8件は昨年度の第Ⅱ種研究から発展したものであり、他は一昨年度以前に第Ⅱ種または第Ⅲ種として助成したものの発展や継続である。研究によっては、必ずしも予備的研究からすぐに本格的な研究へと結びつく必要はなく、一定の期間をおいて十分に成熟させて総合研究に移ることが望ましいものもある。今回第Ⅲ種で不採択となったものも、さらに検討の上、今後ふたたび申請をされることを望みたい。

なお、本年度の第Ⅲ種研究の申請は、比較的申請金額の大きいものが多く、申請どおりの金額で採択すれば助成件数がかなり減ることになる。しかし、選考を経た15



件をさらに減らすことは困難であったので、いくつかのものについては、研究計画の再検討と研究費の縮小をお願いすることにした。これは研究計画に影響を与える点で心苦しいことではあるが、全体を生かすためにやむをえないこととして了承を願うほかはない。

(テーマの特徴など)

採択された63件の研究テーマを、従来おかれていた領域区分によって「環境」「社会福祉」「教育・文化」の三領域と「複合」に分けて概観すると、昨年度は「教育・文化」に関するものがかなりの比重を占めていたが、今

年度は三領域が均整がとれた形になっている。そして、「複合」はとくに増える傾向にあり、三領域を統合した意図が少しずつ実現されてきているように思われる。

また別の面から研究テーマの特徴をいえば、「現場を重視した研究」がほとんどであるということが指摘できる。研究の対象となっている地域や社会や集団に密着した研究が多いように思われるのである。

一覧表になったテーマを見ると、その内容は実に多様であるが、全体として「新しい人間社会の探求」という基本テーマをめざしていると言えるであろう。

1985年度 研究助成対象者

(数字は助成金額、万円)

〈第I種〉平野京子：アメリカ占領が日本映画に及ぼした影響 200／小侯吉孝：ヒトマラリア (Plasmodium falciparum) 可溶性抗原の解析 150／松田こずえ：三宅島の1983年噴火荒廃地における植生回復の初期段階の記録と位置づけ 180／岡敏弘：エントロピー法則から見た経済と人間の新しいあり方 100／西村正雄：先史時代フィリピンにおける国際長距離交易と都市集落の発展 200／

上田実：細胞組込み型人工粘膜の開発およびその臨床応用 190／栗田博之：パプアニューギニアのファス族における歌謡と口頭伝承の研究 200／山本利和：早期失明者の空間的能力に関する発達の研究 180／トラン・ヴァン・トゥ：日本の対東南アジア直接投資の成果・効果についての実証研究 170／武井秀夫：アマゾン河上流域インディオ諸族の医療文化の研究 200／

本田克久：鳥類の非捕殺的モニタリング方式の開発とその標準法作成の試み 190／ステファンソン・ハルドール：東アジアにおける葬礼体系の比較研究 200／鶴飼正樹：大衆演劇における演技の映像による研究 150／志村洋子：母子相互作用における音環境としてのマザリーズ(母語)と乳児の発声行動の関連 180／スントン・ラブキタロウ：19世紀後半の日本における用水開発型地域開発事業の思想及び構想の特性とその変遷 100／川並宏子：南方上座部仏教における女

性の役割と地位 140／石田浩：学歴と社会・経済的地位の達成—日米英国際比較研究 180／西出郁代：米国における高齢者教育プログラムの実証的研究 120／星野道夫：アラスカ北極圏油田開発により変貌しようとする、カリブーの季節移動とその狩猟生活に関わるエスキモーの研究と記録 200／

〈第II種〉内野昇：身体障害者の意識と、行動における周囲とのギャップと社会への融合対策 200／馮昭奎：外から見た日本経済の活力 300／稲田紘：新世代住民に対する新しい保健医療計画の確立 300／吉野正治：「国民の住宅白書」づくりのための予備研究 240／イレーネ・M・ヤング：日欧ビジネスマンの文化摩擦に関する調査方法論的研究 280／吉川利治：日本語およびタイ語一次史料に基づく日・タイ交渉史の予備的基礎研究 300／

渡辺俊一：汎都市化時代の大都市圏における計画システムに関する日・英共同研究 290／吉田忠：医療におけるテクノロジー・アセスメントの予備的研究 260／中島誠：聴覚障害児の身体・心・言葉を育て、健聴児と一緒に生活できる方法を考える 190／水本浩：都市再開発における私権の処理と再構成 150／佐藤孝二：「ヒトと野生」共栄の途を探る 140／

チティ・ピントング：北タイ山岳部族の定着化及びケシ栽培転作計画実施のための基礎的調査 300／小泉明：健康習慣と身体的及び精神的健康度との関連性 270／村井憲男：心身障害児の早期発見のための『母親によるチェックリスト』

の実用化 160／宗像恒次：社会的ハイリスク環境下でのストレスとコーピングに関する行動科学的研究 180／安保哲夫：アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究 300／日高敏隆：東アフリカにおける作物害虫(ズイムシ類)に対する主要作物の低抗性に関する国際共同研究 290／中村悟：北海道沿岸に生息するアザラシ類の保護・管理に関する研究 260／川喜田二郎：ネパール山村における先進国ボランティア団体と、現地NGO、行政、住民との共同参画的地域開発のあり方に関する研究 270／中丸弘子：学校における児童・生徒の人間関係の探求 160／

武田英文：雪に対する住民意識の日本と北欧(主としてフィンランド)との比較に関する研究 220／村川庸子：日米戦時交換船の実態究明と帰国者に関する資料収集 260／松田昭美：中国の乾燥地における沙漠化の機構解明と動態解析(予備調査) 300／森本喜久男：タイ東北部ソンホン村における手織物の向上・発展を支援するための日・タイ共同研究 260／西川幸治：「ガンダーラ地域博物館」基本計画に関する調査・研究 300／

エフレン・フローレス：西太平洋地域における在来型沿岸漁業の比較研究 200／ビシェツ・マオラノン：タイ国における企業内民主主義に関する意識と実態 240／佐々木丞平：国際プロジェクトチームによる日本美術史研究のための基礎資料整備計画 270／

(次ページへ続く)



「新しい人間社会を目指した市民活動の記録の作成」 (研究助成・特定課題)の選考を終えて

選考委員長 縫田曄子

「市民活動」の貴重な体験を多くの人の共有の財産とし、活動の輪をさらに大きくしていこうとする狙いで始まったこの『記録づくり』の助成は、今年で2回目になります。昨年度は、アドヴァイザーという形で選考のお手伝いをさせて頂いたわけですが、今年度は、同じメンバーで独立した選考委員会を組織することになりました。責任の重さを感じるとともに、4名の委員の皆様のご協力により、無事に選考の任を果たすことが出来て安堵しております。

今年度の申請総数は、46件で、昨年度の44件とあまり変わりません。日々の活動を続けていくだけでも大変なことであるにもかかわらず、その記録を自分達でまとめるとなると並大抵のことではないでしょう。そうした点を考えれば、この数の持つ重みも改めて感じられるわけです。

これらの申請書には、全国各地で行われている様々な活動の様子が描かれております。その内訳については、事務局でまとめられた資料によれば、次のようになります。

① <記録の対象となるグループの所在地>

東京19件、大阪5件、北海道4件、兵庫・福岡各2件、他は1件ないし0であり、昨年度と傾向は似ています。

② <活動分野>

障害者福祉11件、環境保護・街づくり・文化活動各5件、医療および健康づくり・消費者活動各4件、教育3件、老人ケア2件、難民救済・海外援助・国際交流各1件。昨年度に比べ、海外援助や国際交流等の分野で重要な活動を行っているグループからの申請がかなり減りましたが、これは、昨年度の申請であるいは出尽くしたということなのでしょうか？

③ <グループの形態>

法人化されていない任意団体が40件と、今年も圧倒的多数を占めています。(他は、財団法人1件、社団法人3件、株式会社1件、その他1件)

④ <活動歴>

5年未満12件、5年以上10年未満16件、10年以上20年未満13件、20年以上5件と、これも昨年度の傾向とあまり変わっておりません。

次に、選考については、「申請の手引」にも書いてありますように、以下の点を尊重しながら評価・選考を行いました。即ち、1)活動自体が多くの人に支えられており、その体験が広く共有出来ること、2)既成の考え方にとられない柔軟な発想やアイデアに基づく活動であり、積極的に創造的な性格を有していること、3)国際的な広がりの中で意義ある活動であること、4)現時点で記録を整理し公表することが、そのグループにとっても社会にとっても今後の発展の重要な契機となり得ること、5)記録の作成に係わる適切な人材を確保出来ていること、などがあります。

そして、選考委員会では、大変熱のこもった審議がなされたわけですが、どれをとっても、極めて意欲的な申請ばかりなので、絞り込むのに苦労したことを覚えております。それでも、議論の過程で、活動内容にやや迫力を欠くものや、かなり自力で記録を作成することが可能と思われるグループからの申請はご遠慮頂くことになり、結果として別紙の通りの11グループが採択となりました。

昨年度助成を受けられた11のグループは、順調にその記録作成の作業を進めておられると伺っております。財団の事務局では、こうして作成された記録の出版についても助成が行なえるよう、その方法を現在検討中とのことです。今回助成を受けられた方々も、日々の活動の中を大変なこととは存じますが、是非とも立派な記録にまとめられますよう期待しております。

なお、惜しくも助成対象とならなかったグループにつきましては、今後、十分な活動体験や活動内容を蓄積されたうえで、再度申請されることをお勧め致します。

酒井直樹：近世・近代日本のセクシュアリティの歴史 280／

<第III種> 直良博人：遺伝子の領域効果にもとづく発ガン機構の研究 700／西村辨作：ダウン症幼児の早期療育プログラムについての臨床的研究 320／

和田義郎：先天異常の総合的医療支援システムの作成と運用に関する研究 480／川村次郎：背髄麻痺者に対する機能的電気刺激の実用化研究 1,000／源了圓：日本文化と日本人の形成 470／宮城雅子：航空におけるINCIDENT REPORT

SYSTEMに関する総合的研究 960／

田上隆司：日本語対応「手話辞典」編纂作成のための総合研究 500／大橋信夫：職場集団における文化摩擦と葛藤 1,500／井上輝子：女性雑誌の日・墨・米比較研究 660／ (次ページへ続く)



姫田忠義：山地生活者の平地への移住による生活および生活文化の変容に関する追跡研究 1,100／伊東孝：都市における歴史的土木遺産の評価と継承に関する研究 500／清水誠：海洋に投棄されたごみが生物に及ぼす影響に関する研究 750／石川忠臣：町並み保存運動の展開と全国町並み保存連盟の役割 400／高谷好一：伝統的サゴ生産集落における経済力向上の試み 370／石川信克：バングラディッシュの農村におけるプライマリーヘルスケア促進に関する研究 370／

〈特定課題〉市民活動の記録の作成 青山貞一：日本環境プランナーズ会議(NEPA) 180／米本憲市：天神崎保全市民協議会 180／広田寿子：働く母の会 160／小島純郎：福島智君とともに歩む会 200／平野真佐子：老人給食協力会「ふきのとう」190／吹浦忠正：難民を助ける会 180／小林静江：ふきのとう文庫 170／野村かつ子：海外市民活動情報センター 190／山岡浩一：北九州YMCAグループワーク研究会「のびのびキャンプ実行委員会」160／杉原貞男：関西分譲共同住宅管理組合協議会 190／安土義雄：大野の水を考える会 180

ご案内

1983・84年度研究助成

中間・最終報告会

- ◇日時：1985年11月8日(金)9日(土)
◇場所：東京港区六本木 国際文化会館・セミナールームD室
◇プログラム：
11月8日(金)
13:00～15:00 末田達彦(木曾御料林の保全)／黒田長久(ハンボソミズナギドリ)／村上慶直(災害事例のデータ・バンク)／今泉 清(下町の職人)
15:20～17:50 布野修司(インドネシアのカンポン)／益田庄三(日韓漁村比較)／市川信愛(華僑学校)／阿部 洋(対支文化事業)／奥平龍二(日本・ビルマ交流史)
11月9日(土)
13:20～15:20 吉沢典男(方言のイントネーション)／井出祥子(日米敬語行動)／越永重四郎(親子心中の発生要因)／井上果子(ブラジル日系人の心理)
15:40～17:40 織田正美(老化の心理・生理)／新庄文明(地域歯科保健活動)／由上修三(インフルエンザワクチン効果)／中川 武(アジアの建築遺構)

第3回研究コンクール

“身近な環境をみつめよう”

中間研究報告会

- ◇日時：1985年11月30日(土)
◇場所：東京港区六本木 国際文化会館 講堂
◇プログラム：
10:00～12:30 都市鳥研究会／水系環境を考える会／やば耕作団／アジメドジョウ岐阜県調査会
13:40～15:25 愛知の産業遺跡・遺物調査保存研究会／リフォーム浜校区研究会／南部の味と暮らしの環境を考える会
15:45～17:30 上野の緑地環境研究会／杉十小・学校環境研究会／とやまの雪研究会

「わたしたちのまち・自然・いのち」

第2回研究コンクール映像記録作品
16mmとビデオ 貸し出し中
奨励賞4チームの2年にわたる活動の映像記録です。貸出は無料(返送料のみご負担下さい)。お問い合わせは財団まで。

助成財団資料センター 調査報告書まとまる

昨年5月以来、22名の財団関係者が集まって検討委員会(代表林雄二郎)を組織し、助成財団資料センターの設立の可能性について検討してきたが、このほどその調査報告書がまとまった。

アメリカにはすでに本格的な財団センターがあって、全米の財団がどのような活動を行っているかが即座にわかるような情報システムが確立しており、数々の統計調査なども行っている。規模は小さいが、西ドイツやイギリスにも同様の機能を果たす組織があり、最近ではカナダやオランダにもセンターが設立された。財団後進国のわが国にも、ようやく同種の組織ができようとしており、今後の財団活動の発展のためには大変喜ばしいこと

である。

この助成財団資料センターは次のような基本的性格をもつものとして構想されている。すなわち、

- ① 助成型財団等に関する資料・文献などの図書館としての性格
- ② 助成する側と助成を求める側との情報交換の場としての性格
- ③ 助成活動の内容全般について社会的な理解を促進する機関としての性格である。なおここで言っている「助成型財団等」というのは、助成・表彰・奨学事業を主目的とする財団や公益信託その他の法人ということである。

当面は任意団体として会員財団からの会費や有志財団からの助成金などによっ



アメリカの財団センターの閲覧室
(昨年移転したがこの写真は移転前のもの)

て運営するが、将来は基金をもった法人となることが目標とされている。運営費の確保についてはかなりの困難もあるようだが、ともかく何らかの形でスタートすべきではないかというのが調査の結論と言えよう。トヨタ財団としても、この設立に向けての積極的に関与する方針が先の理事会で確認された。(久須美・記)



ハーグ・クラブの総会に出席して

トヨタ財団専務理事 林 雄二郎

ハーグ・クラブのコレスポンディングメンバーというプロポーズを昨秋、当財団設立十周年記念国際シンポジウムに出席のため来日されたファン・リア財団ウェリング専務理事（ハーグ・クラブ前会長）とヨーロッパ文化財団ジオリス事務局長（同現会長）の二人から正式に受けた時には、正直のところそれほど大したことはないと思っていた。ところが、去る9月11日～13日にベルリンのアспен研究所で開かれたクラブの1985年次通常総会に出席して、私自身たいへんな認識不足だったことを痛切に反省させられた。

クラブの今度の総会での主たる討議テーマは東西問題であった。会場がベルリンでもあり、まさに時節柄うってつけのテーマであった。このような問題についてヨーロッパとしての何か共通の計画はできないものか、いわばヨーロッパ計画のごときものの可能性はどうか、といったようなことについて活発な討議が行われた。その議論の中で、私は、我ながら愚問を発してしまった。

——皆さんの話の中にはECとかOECD、国連委といったような国際機関が一向に登場しないが、これらの国際機関はこのような問題に対して有効な機能を持っていないのですか？——

という私の問いに対して即座に答えが返ってきた。

——そんなことはありません。どの国際機関もそれぞれに極めて有効な機能を発揮していますよ。しかし、これらの国際機関はいずれも各国の政府によって構成されています。私たちは民間の財団の人間です。あなたも日本の最も有力な財団を運営しておられるので十分にご承知のことと思いますが、政府の機能と民間財団の機能とは明らかに違いますね。私たちは民間財団の立場に立って議論をしているわけですから自ずから政府のそれとは異なる次元での論議ができる筈です。——

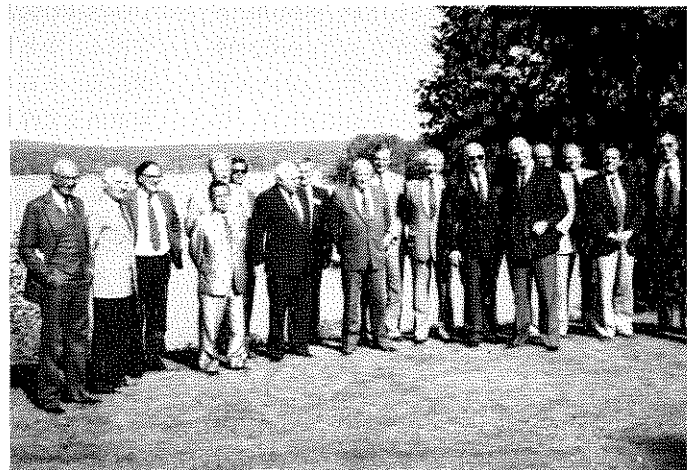
いわれるまでもない。そんなことは常日頃私自身、日本で言いつづけてきたことである。持論の第三セクター論とはまさしくそれではないか。にもかかわらず、その私が肝腎の舞台で何たる愚問を発してしまったことか。私はそのとき反省すると同時につくづく思ったことは、

いわゆる第三セクターなるものが日本には存在していない、たとえ存在しているとしても、ヨーロッパ——そしてむろんいうまでもなくアメリカでも——でのそれとくらべればまるでお話にならない弱小なものであるという、悲しいことだけれどもどうにも仕様のない厳然たる事実に対する確認であった。

ハーグ・クラブというのはヨーロッパの主要な財団の幹部の人25名から成る個人の集まりで、そのコレスポンディングメンバーとしては、アメリカの財団協議会のジェームス・ジョセフ会長ほか数名のヨーロッパ以外の財団人が指名されている。その一人に私が選ばれたわけである。毎年一回総会をまわり持ちで開いているが、その開会に当っては、それぞれの国の国家元首が出席するという慣例になっており、今回もドイツ連邦共和国のワイゼッカー大統領が出席した。

それはさておき、クラブの総会を通じてヨーロッパにおける財団界の重みのようなものはひしひしと肌を迫るものがあった。2年前にイギリスのディッチレーパークで開かれた世界財団会議に出席した折にも強く感じたことであるが、欧米における財団界なるものの存在の重要さは、ちょっと日本では想像できない。いい意味での政府に対する批判者として財団の果している役割の大きさ、またそれぞれの社会の中で財団に対する認知度の高さ、それは日本ではほとんど知られていない。貿易摩擦問題、通貨問題、その他の諸問題に対して日本では政府ならびに当事者だけの対応しかしていない。財団の役割はゼロに等しい。しかし、欧米ではその他に太い第三セクターのパイプが存在し、機能している。そしてそれとつながるパイプが日本には無い。しかも、日本は今や世界中でいろいろな意味で大きな国となってきている。にもかかわらず、このような現状のままにあるのはひとり日本自身にとって不幸なことであるのみならず、世界にとって大きなマイナスではないだろうか。

ヨーロッパ財団界の重鎮たち（左から4人目筆者）





国際ME学会で手話システムについて発表

大阪大学基礎工学部 田村 進一

我々は昭和57年度よりトヨタ財団の助成によって、手話システムの開発を行って参りました。開発したシステムは筑波・科学博の「障害者・お年寄センター」にて展示されましたので御存知の方も多いと思いますが、音声などで入力された文章をパソコンと光ディスクを用いて手話映像に変えて表示するものです。

今回、上記の開発の成果発表のため財団より助成をいただき、8月11日～16日にフィンランドのヘルシンキ近郊エスポーで開かれた国際ME学会に出席する機会を得ましたので、会議の様子などをお伝えしたいと思います。

国際ME学会は3年毎に世界各地で開かれており、ME（医用電子・医用工学）関係の国際会議としては最大のものであります。今回は国際医学物理学会と共催で開かれ、次回は1988年サンアントニオで開かれるが、次回回は1991年日本で開かれることが決まりました。

会議には1000余名参加、うち日本人は100余名に達しており、開催国フィンランドよりも多く最大の参加者数であった。会議はヘルシンキの西10km位のエスポー市オタニエミで開かれた。フィンランドは森と湖の国と言われるが、オタニエミはヘルシンキより連なる湾と緑の島々に囲まれた小さな半島の景勝地にあり、ディポリ会議センターを中心として、ヘルシンキ工科大学、ホテルなどからなるコンGRESS・コンプレックスの体をなしている。会議は開会式のみディポリ会議センターで行われたが、後の各セッションはヘルシンキ工科大学で行われた。大学の学生寮はサマーホテルとして解放されるなど会議のための有機的な運営がなされていた。

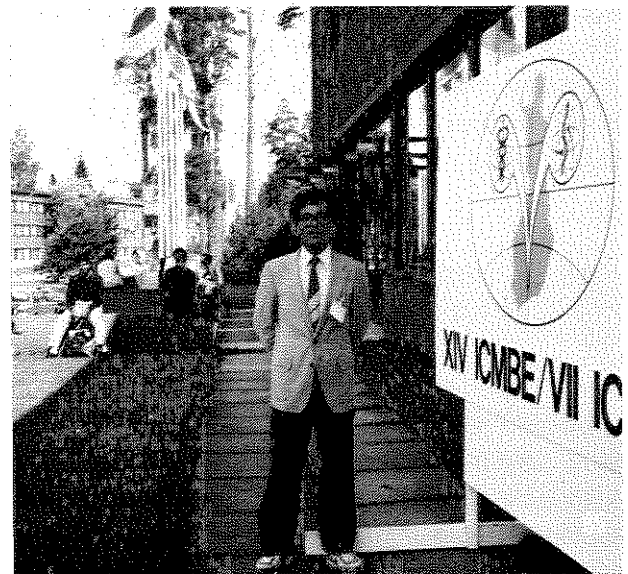
会議は11会場に分れて行われた。我々の手話システムは「リハビリテーション工学」のセッションで発表された。このセッションでは会議の全論文数770近くのうち49編が発表された。これらは、補装具に対する北欧共同評価、埋め込み電極による筋刺激、歩行解析、会話補助の4つのサブテーマにわけられて発表された。補装具に対する北欧共同評価は北欧で開かれた会議らしいサブテーマであるが、総論賛成、各論議論百出に終わった感があ

る。埋め込み電極による筋刺激ではユーゴやウィーンのグループからの臨床報告がなされ、注目を引いたが、実用化にはまだ時間がかかりそうであった。歩行解析では岡山大学の山本尚武先生がトヨタ財団の助成によるインピーダンス法を発表された。会話補助では10編の論文が発表され賑わいを見せていた。我々の発表もこのサブテーマのもとに行われたが、表示方法などについて突っ込んだ質問があり、関心の深さが感じられた。

会議の合い間には見学会やジョギング大会が開かれた。日本の学会ではほとんどジョギング大会などは開かれないうが欧米の会議では恒例化しつつある。筆者は大の愛好家であり、ジョギング大会に参加した。会議場から4.5km、橋を渡った小島の南端にある緑に囲まれたサウナ前がゴールである。フィンランド名物、サウナに入りながらのビールと裸のつき合いは格別であった。

会議前、イギリスのエセックス大学に立ち寄った。旧知のピアースン教授のところでは、電話回線による手話通信の研究を行っており、TVカメラでとらえた手話画像を帯域圧縮して電話回線で送っていた。我々のシステムの場合には映像の形ではなく、コード情報を送るだけで受信側で対応する映像を光ディスクから取り出す形となるが、これらのシステム間の比較など有益なディスカッションが行えた。

今回の会議参加の機会を与えて下さったトヨタ財団に改めて御礼申し上げます。



会議場のヘルシンキ工科大学の正面玄関に立つ筆者



新刊紹介

『JOLG版東南アジア邦文文献目録 1946～1983』

アジア資料懇話会編・刊
B-5判 396頁 20,000円

アジア資料懇話会(略称JOLG)は、アジア研究専門司書をはじめ、アジアに関心ある研究者や出版関係者が集まって1981年12月に発足した会で、現在では海外を含む70名ほどのメンバーが所属している。同会は当財団のフォーラム助成により、3年前からこの目録作成に取り組んできたが、昨年秋の10周年記念特別助成によってその完成と出版に至ったものである。

本目録には1946年以来83年までに刊行された東南アジア関係の邦文図書約6000点が収録されている。各文献には、外国人の利用の便を考慮し、著者のローマ字読みと著作についての英文注記が付されている。巻末にはアルファベット順に著者索引が付されている。すべての項目はデータベースとしてコンピュータに入力されており、将来さまざまな活用が可能である。なお、今回の目録の販売は紀伊国屋書店に一括委託しているため、お求めは同書店に連絡していただきたい。

なお、同懇話会では、特別助成によるプロジェクトとして、さらに「東南アジア・戦前編」の編纂、「日本におけるアラブ研究文献目録」(当財団助成成果)補遺版の編纂などを予定している。

『文化としての先端技術(上)』

文化としての先端技術を考える会・編著
日本放送出版協会刊
4-6判 247頁 1,500円

先端技術の開発が急速に進みつつあるが、その普及は将来どのような文化を生み出すのであろうか?

このような問いかけから昨年夏に「文化としての先端技術を考える会」(代表加藤迪)が生まれ、財団のフォーラム助成

身近な環境をみつめよう トヨタ財団第4回研究コンクール公募案内

なにかを不思議に思ったら……
なにかを美しいと思ったら……
なにかをこれじゃ困ると思ったら……

ゴキブリにも真理が

それがもう研究の始まりです。
みつめる、考える、話し合う、
歩き回る、手でさわる、
筋道を立てる、試行錯誤
おおいに結構、結論が
出なくてもいい、挫折も必要、けんかも楽しい。
研究は人生の数多い喜びのひとつです。
知ることの快樂が、いつの世にも
人間を未来へと向かわせてきたのです。

ひそむ

研究のコンクールです。
テーマは身近な環境に関するものならなんでもかまいません。主婦、学生、専門研究者、だれでも参加できます。チームを組んで応募ください。研究費は1チームにつき400万円、2年間の研究活動のために、約10チームに対し助成します。
この2年間ですぐれた研究成果をあげたチームを表彰し、特に長期的な活動が期待されるものには、研究奨励基金などを贈呈します。詳しくはトヨタ財団までお問い合わせください。

[資料請求・問い合わせ先]
〒163新宿区西新宿2-1-1
三井ビル37楼 Tel:344-1701
財団法人トヨタ財団 研究コンクール係

●後援:NHK ●公募期間:1985年11月1日～1986年1月15日

によって定例研究会が開始された。毎回、先端技術の開発の第一線にたずさわっている研究者をゲストに招いて話を聞き、7名のコアメンバーを中心に議論を重ねてきた。本書はその話と討論をもとに、ゲストスピーカーとコアメンバーが各テーマ毎に分担執筆したものである。

この上巻には、ロボット、コンピューター、ニューメディアに関する8項目のテーマがとりあげられている。下巻は12月末の発行予定で、新素材、バイオテクノロジー、エネルギーに関する7項目のテーマが収められることになっている。

information.....

当財団の林雄二郎専務理事が去る9月5日、西ドイツから第一等功勞十字章を授与されました。過去10年にわたって「日独情報化社会シンポジウム」を開催してきた功績や財団活動を通して日独の文化交流に尽した功績が認められたものです。

編集後記

◆阪大の田村先生には国際ME学会の様子をレポートしていただきました。ありがとうございます。ジョギング大会というのがいいですね。残念ながら筑波の科学博はとうとう行けずじまいでした。

◆筑波博はしよせん映像とロボットのお子様ランチという説もありましたが、こういうメディアこそが、お子様に“科学技術”をインプリントするのに絶大な力を発揮してきたのでは?

◆いよいよ第4回コンクールがスタートです。研究はいまや専門家だけの楽しみではない時代。皆様のまわりの方にもぜひお伝えください。

◆先日NHKのETV8で“隣プロ”のことを取り上げていただきましたところ、即日50人以上の方から問い合わせがありました。ありがとうございます。

トヨタ財団レポート No.34

このレポートを継続してご希望の方は、ハガキにて財団までお申しこみ下さい。

発行日 1985年10月24日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 山口日出夫
編集人 久須美雅昭
印刷 真友工芸株式会社